静 岡 学 園 短 期 大 学 研 究 報 告
The Shizuoka Gakuen College Review
第5号（1992）別刷

日本と韓国における青少年文化と意識構造の比較研究（その1）
——新たな両国の相互理解教育の基礎的作業として——

A Comparative Study of Juvenile Culture and Conscious Structure in Japan and Korea (1)

馬 居 政 幸・夫　　伯[1)]

Masayuki UMAI and Baek POE

静 岡 学 園 短 期 大 学

日本と韓国における青少年文化と意識構造の比較研究（その1）
——新たな両国の相互理解教育の基礎的作業として——

A Comparative Study of Juvenile Culture and Conscious Structure in Japan and Korea (1)

馬　居　政　幸・夫　　伯[1)]

Masayuki UMAI and Baek POE

(平成5年3月16日受理)

本研究は，日本と韓国の青少年の意識特性とそれを創出する多様な文化の表層と深層における同質性と異質性の構造を明らかにするための比較研究の一貫として，韓国青少年の日常生活の中に浸透する日本の青少年文化の現状とその問題点について実証的に探究することを通じて，日韓両国の間における新たな相互理解教育のありかたを考察することを目的とするものである。

特に，この研究の第一段階として，我々は，近年著しくなった韓国への日本の青少年文化の浸透の現状とその問題点を明らかにするために，昨年（1992年）4月より，日韓両国の関係者へのインタビュー調査と関連資料の収集に努めてきた。とりわけ，韓国の教育関係者やマスコミ等により懸念が表明されつつある，日本の漫画の急激な流入とそれらの韓国青少年への影響を実証的に明らかにするための基礎資料を収集し，分析を進めてきた。その研究経過の第1次報告として，本論文を発表する。

1．国際化社会における日本と韓国の相互理解教育のための課題とは

国際化が急激に進行する現代社会にあって，国家間の相互理解を深める教育が当面する最も重要かつ困難な課題は，①国家という枠組を前提とした自国認識と他国理解を，②国家の境界の相対化（ボーダーレス）が進行する過程において構築しなければならない，ということであると考える。[2)]

特に，この課題は日本と韓国の新たな関係を創造する上で重要である。

第二次大戦後，日韓両国においては，その歴史的地理的条件に基づき，互いに独立した国家

としての固有のアイデンティティを構築することを課題としてきた。だが他方で，現在では，顕在的・潜在的に相互に浸透する政治・経済・文化などの社会的条件を背景に，両国のアイデンティティの融合もまた実質的に進行する過程にあることも無視できない事実である。その結果，両国の間では，これまで様々な次元で，共有性と固有性が螺旋的に絡み合いながら形成されることにより，相互理解の契機の創造と破壊がくりかえされてきたと考える。

とりわけ，教育の問題においては，両国の歴史的事実についての教科書記述の相違を代表として，韓国の人達の日本への“いらだち（非難）”と，日本の人達の韓国への“負い目（無関心）”が相乗的に作用して，両国の教育関係者が，互いの“現状”に“同じ目の高さ”で“知りあい，学びあい，教えあう”機会を見失いがちであったと考える。[3)]

ところで，韓国は，周知のように，70年代から80年代にかけて「漢江の奇跡」と呼ばれる経済の高度成長を達成し，その成果を1988年のソウルオリンピックという国家イベントに見事に結実させ，ニーズ諸国の優等生として国際社会に踊り出た。しかし，その後の東西冷戦構造の解体という世界史的変動の中で，現在は急激な産業化に伴う社会の構造変動の真っ只中にある。

共著者の一人である馬居は，上記の問題意識に基づき，このような韓国社会の現状，とりわけ学校や家庭や地域社会における子どもの教育の現状を自分の身体で感得することを目的に，1986年1月4日に初めて訪れて以来，韓国への旅を繰り返してきた。特に，静岡大学大学院教育学研究科に留学してこられた宋在鴻（ソン チェフォン）先生の援助を得て，韓国大田市にある小学校や中学校や高等学校の授業に参加し，小学生，中学生，高校生，大学生と対話を重ねてきた。その過程で構造的には類似した韓国の教育システムにおいて，日本とは異なる子どもや若者の“学びと育ちの現場”を認識することができた。

なかでも，小・中・高いずれの教室でも，教壇に立った馬居に対して，明確に自分の意思を持って質問し反論してくれたことに，驚きと感動を禁じえなかった。日本の教室において，小，中，高と学年と学校が上がるにしたがい意見を述べなくなる授業風景に見なれていたからである。あるいは，先生方が表情豊かに語りかける授業から，日本が韓国に学ぶべき教育のあり方を見出すことができた。[4)]

他方，共著者の一人である夫伯（プー ベック）は，在日韓国人として生まれ，小学校教育から大学教育までを，日本において被教育者として経験した。さらに，1984年3月より母国のソウル大学に学んだ後，1988年3月に韓国外国語大学大学院修士課程に進学し，1990年2月に修士号を取得した。そして，韓国の大元外国語高等学校や韓国外国語大学等で日本語教育の職につくとともに，日韓両国の文学の比較研究を進めてきた。

このように，日本においては被教育者として，また韓国においては被教育者と教育者という二つの立場において，日韓両国の教育を経験することにより，夫伯は上述したような日韓両国の間にある教育上の問題点と相互理解を進める上での課題を馬居と共有するに至った。

さらに，馬居と夫伯は，このような互いの経験と研究に基づく問題意識により，両国の青少年の現状やその教育上の問題点を解決するための課題について論議する過程で，日本と韓国の相互理解を阻む困難な要因として，次の4種の“現状”があることを確認せざるをえなかった。

2．両国の相互認識に関する情報の差異

図－1の上図の『韓国⇨日本』は，我々が韓国での生活と資料収集やインタビュー調査により得た韓国における日本に関する文化・情報を，「公的－私的」，「日常的－非日常的」という二

つの軸で分類したものである。下図の『日本⇨韓国』は，同様の視点から日本における韓国に関する文化・情報を分類したものである。

図－１「日本と韓国における相互の国に関する文化・情報の性格の差異」

『韓国⇨日本』
※○印は反日意識に関係する情報

日常的

IV	I
○家族，一族の被害 日常生活用品 耐久消費財	○学校教育 ○マスコミ報道 （大衆媒体） 衛星放送
III	**II**
○家族，一族の忌日 音楽（演歌，カラオケ） 漫画，ビデオ 女性雑誌（ファッション） 小説	○独立記念館 ○慶祝日（光復節，三．一節，・・） ○名所・旧跡にある記念碑 （壬辰・丁酉倭乱， 日帝時代の痕跡）

私的 ―――― 公的

非日常的

『日本⇨韓国』

日常的

IV	I
	学校教育（古代中心）
III	**II**
スポーツ 音楽 観光	マスコミ報道 （加害者としての日本， 韓国の対日批判・・）

私的 ―――― 公的

非日常的

両国の情報の量と性格の差異に注目していただきたい。

まず，『日本⇨韓国』に比較して『韓国⇨日本』の情報が圧倒的に多いことが理解できよう。さらに，より大きな差は情報の質である。『韓国⇨日本』の図が示すように，Ⅰ～Ⅳの全ての領域において，韓国における日本の情報には○印のついた項目が多い。いずれも，韓国の人達に“反日意識”を喚起する情報である。

これが確認すべき第一の“現状”である。

それは，韓国の子どもや若者の間に，日本の加害性という“歴史的事実の重み”を基盤に，小学校から中学校，高等学校へと成長するに従って，次の①～⑥のような社会過程が総合されることにより，戦後（解放後）40数年を経てもなお“反日意識”はより強く育成されている，という“現状”と結びつく。

①日常的に学校教育を通じて教えられる公的な事実（Ⅰ）
②日常的にテレビ・新聞等の情報環境による公的な事実とその再確認（Ⅰ）
③日常の身近な人間関係や生活習慣に深く刻まれた私的な事実（Ⅳ）
④慶祝日や名所・旧跡の碑文などによる，非日常的で聖的な価値に基づく公的な正当化（Ⅱ）
⑤家族や一族の忌日（命日）などで繰り返し確認される非日常的で聖的な価値に基づく私的な正当化（Ⅲ）
⑥このような韓国の現状を無視する（理解できない）としか韓国の人達にとらえられない日本の側の対応と，その事実を増幅する報道（Ⅰ）

日本に最も近く国境（ボーダー）を隔てる国が韓国である。韓国のソウル市では日本の衛星放送を直接受信することが可能である。近年，日常的に両国を行き交う人の数も増加している。だが，それでもなお，文字通り「近くて遠い国」と評されるように，両国の間にある壁は厚い。それを象徴する事実が両国の情報の量的質的な差異であると考える。

他方，このような社会過程がある一方で，現代の韓国社会に次のような現象が進行していることも否定できない事実である。

それは，図－1の上図のⅢとⅣが示すように，カラオケ，ファッション，漫画，アニメなどの“遊びの世界”（Ⅲ）に，あるいは日常生活用品や耐久消費財など“日常生活に使用するモノ”（Ⅳ）の中に，“日本の現代文化”が実質的に浸透していることである。これが確認すべき第二の“現状”である。

さらに，第三の確認すべき“現状”として，この相反する二つの“現状”は，韓国の子どもや若者の間に次のような意識を醸成しているとことを指摘しなければならない。

すなわち，日常的・非日常的に繰り返し確認され育成される反日意識と，顕在的・潜在的に浸透する日本の現代文化の狭間に生じる溝を埋めるために，日本の“現状”とりわけ同世代の“現状”に関する情報への欲求が非常に強いということである。

次の写真は，昨年（1992年）12月に訪韓した際に，ソウル市の明洞の裏通りにある書店の前に立つ馬居を夫伯が撮影したものである。この書店では，日本の漫画や雑誌や小説などが，ほぼリアルタイムで，日本の定価の数倍で販売されている。中には10倍近い値段のものもある。両国の経済力の差から考えて，かなり高価であることは間違いない。それでも，我々が書店にいた十数分の間に若い男女が次々と訪れ買い求めていった。

このようないわば日本の書物の専門店ともいうべき書店はソウル市内にかなりある。またソウル市以外でも，各地方の中心都市には，専門店はないものの，通常の書店や市場で日本の雑誌や書物を手に入れることはそれほど困難ではない。ハングル訳の日本の書物であれば，どの書店にも置かれ，その中には正式に出版許可をえたものではない書物もないわけではない。特に，街角の小さな書店に，明らかに日本の漫画の無断コピー（いわゆる海賊版）と思われるハングル版の漫画の単行本が，数十種類書棚に並べられていることも珍しくない。

加えて，韓国では日本の出版社との正式契約に基づき，日本の子どもや若者向けの漫画雑誌に連載中の人気漫画のハングル版を，ほぼリアルタイムで掲載した週刊や月刊の漫画雑誌が数誌発刊されている。

このように，かなり高価であり，また必ずしも合法的ではないにもかかわらず，韓国の青少年に日本の書物がリアルタイムで受け入れられている事実は，彼ら彼女らの間にある日本の“現状”に関する情報への欲求の強さを示すものと考える。

だが，その一方で，日本の現代文化の流入に対して，様々な批判があることも事実である。特に，ここ数年，日本の青少年向けの漫画や雑誌の韓国への流入を「新たな日本文化の侵略」としてとらえる批判（排斥）キャンペーンが，マスコミ等により度々なされている。政府の指導により，一時，書店から日本の漫画や雑誌が翻訳本も含め撤去されたこともあった。しかし，それでもなお，写真で紹介したように，日本の漫画や雑誌が現在も書店で売られていることもまた事実である。

そして，本研究の課題と関係して我々がより重要な問題として考えるのは，このような韓国の子どもや若者の“現状”を，韓国教育関係者が必ずしも正確に捉えていないのではないか，と思わざるをえないことである。さらに，その結果，彼ら彼女らの“欲求に応じた適切な答え”を用意するにはいたっていないと判断せざるをえない，という“現状”である。

これが我々が確認した第四の“現状”である。

我々もまた，通常いわれるように，両国の相互理解を阻む第一の要因が，日本の側の歴史認識とその教育のあり方にあることに同意する。だが，そのことを前提としつつも，両国の新たな関係を創造するために，とりわけ未来を担う青少年の間に，国境を越えて“共に生きる世界”を創造するための“契機”を見いだすために，我々が確認し４種に分類した上記の韓国における日本に関する情報の量と質の意味を問うこともまた重要な課題と考える。

このような現状認識と課題意識に基づき，我々は本研究を進めるにあたり，その第一段階として，次の仮説を持った。

韓国の子どもや若者の間にある，日本の現状に関する情報を欲する意識を生み出す原因であるとともに，その欲求に応じた答えを実質的に提供しているのが，日本の漫画のハングル訳や日本の漫画に学んだ韓国の漫画文化ではないか。

3．韓国の漫画文化関係者へのインタビュー調査から

我々は，この仮説を検証するために，昨年（1992年）の4月，6月，8月，12月の四度にわたり，韓国全体で数十万部発行されている少年漫画雑誌の編集者，非合法な海賊版の漫画を出版している編集者，日本の漫画の翻訳者，韓国の漫画家，読者である小学生や中学生や高校生や大学生，あるいは青少年文化の研究者や教育関係者にインタビュー調査を試みた。特に，日本の漫画が，日本と同時進行的に翻訳され出版される現状についての評価とその編集過程について，あるいは広く韓国漫画文化と日本の漫画文化とのかかわりについて質問した。また，同様の観点から，韓国の新聞，テレビ，雑誌等のマスコミを通じて報道された記事を収集してきた。

そして，現在，それらを多様な観点から分析中である。その詳細については稿を改めたいが，この分析過程において，韓国の漫画関係者の日本の漫画の韓国への流入に対する評価を，おおよそ次の三つの傾向にまとめることができた。

①日本の漫画は，性的描写や暴力場面が多く，韓国の子どもに有害であり，そのような日本の漫画が韓国に増えることは文化侵略でもある。
②韓国の漫画家が育つまでの過度的なものとして，やむをえず日本の漫画を受け入れるが本意ではなく，できるだけ早く中止したい。
③韓国の漫画文化を豊かにするために優れた日本の漫画を積極的に取り入れ，いずれは追いつき追い越し，逆に日本に進出したい。

残念ながら，①から③の順序はインタビューで得た意見の多さの順序でもある。

ここでも日本への厳しい認識を確認せざるをえなかった。

ただし，先に指摘したように，韓国で出版されている日本の漫画の多くはライセンスを得ていない海賊版であることを改めて確認しておかねばならない。

我々の日本での取材によれば，1992年の時点で韓国の出版社が正式に契約している日本の出版社は講談社，集英社，小学館，秋田書店の4社のみである。それも4雑誌13タイトルに限定されている。また，海賊版の中には，日本において子どもではなく青年層を対象に出版されている漫画も多い。そのため，特に①のような指摘に対して，日本の出版社としては，いわれのない非難，としか答えることができないのが実情である。

加えて，漫画は読者の日常生活を反映するメディアである。日本の漫画は現代日本の子どもや若者の文化に即して描かれる。したがって，このような漫画メディアの特性を考慮せずに，文化の異なる国の言葉に翻訳されれば，当然ズレが生じ，意図せざる問題を引き起こす可能性

が高い。

さらに，漫画はかって日本でもそうであったように，多くの国で活字メディアに比較して質の低いメディアとして位置づけられる傾向が強い。

そのため，漫画雑誌を出版している日本の各出版社は，外国に出版許可を与えるにあたって，他の海賊版をなくすことができる力を持った出版社であるかどうか，あるいはその国の人達に信頼されている出版社であるかどうか，といった点についての調査を必要とする。何よりも，過去の歴史をふまえ，反日意識の強い国には慎重にならざるをえない。

しかし，このような配慮がかえって誤解を生む場合もある。

昨年の６月，我々は，日本の少年ジャンプに連載中のドラゴンボールの単行本を無許可でハングル版に翻訳して出版している海賊版の編集者にインタビューすることができた。その中で，「なぜ日本の出版社の許可をとらないのか」という我々の質問に対して次のように答えてくれた。

「日本の出版社にライセンスを求めても許可してくれない。日本は非合法の出版を黙認して，需要が高まる（ライセンス料があがる？）のをまっているのではないか。」

これこそ日本の出版社にとっては対処の仕様のない不満であろう。政府の規制や法の網み目をぬってゲリラ的に活動する会社に出版許可をだすことはできない。非合法な出版に抗議したくても，それ自体は国内法としての著作権法に関係することである。場合によっては内政干渉と受け取られ，新たな反日意識を喚起する可能性もある。したがって不本意ではあるが黙認せざるをえない，というのが日本の出版社の立場と考える。

韓国の出版社による日本の漫画の非合法出版

⇩

韓国のマスコミや教育界等による，日韓両国の文化の差異と反日意識が重なることにより生じる日本に対する文化侵略批判

⇩

日本の出版社は文化の差異や反日意識を考慮すれば，韓国の出版社に許可を出すことができず，抗議も控えざるをえない

⇩

日本の漫画が売れる以上，許可がなくとも漫画を出版する韓国の出版社

⇩

韓国マスコミ・教育界等による新たな文化侵略の非難・・・

このような悪循環が日本の漫画をめぐって生じていることを，我々は日韓両国の出版関係者のインタビュー調査を通じて理解せざるをえなかった。

しかし，他方で，このような困難な現状を克服し，日本と韓国の子どもや若者が“真のイコールパートナーとして共に生きる世界”を新たに創造するための手掛かりとなる言葉もまた，韓国でのインタビューの過程で見出すこともできた。

それは，我々の「なぜ日本でも韓国でも，これほど漫画が子どもや若者に受け入れられるのか」との質問に対して，世界の漫画文化の現状を俯瞰しつつ答えてくれた韓国の漫画雑誌『少年チャンプ』の編集部長の黄卿泰（ファン ギョンテ）氏の次の言葉である。

「漫画には作者と読者の間に“공감대（コンガムデー　共感帯）”があるからです。」

4．新たな“공감대（コンガムデー 共感帯）”の創造を

次の図は，日本の『少年ジャンプ』（集英社）に連載中の「スラムダンク」のハングル訳の版下原稿である。黄部長が編集する少年チャンプ編集部でいただいたものである。

図－2「ハングル訳『スラムダンク』の版下」

井上雄彦／集英社

『少年チャンプ』は，ソウル市にある図書出版大元株式会社により，1991年12月に創刊された週刊少年雑誌である。この雑誌には「スラムダンク」に加え「ダイの大冒険」が，韓国の漫画作家による連載漫画とともに掲載されている。同様に，月刊『少年チャンプ』には「幽遊白書」が掲載されている。

さらに，『少年チャンプ』の先行ライバル誌である『ＩＱジャンプ』（ソウル文化社）には，「ドラゴンボール」が掲載されている。

この「スラムダンク」「ダイの大冒険」「幽遊白書」「ドラゴンボール」という四つの漫画は，いずれも日本で発行部数週500～600万部を誇る『少年ジャンプ』に連載中の人気漫画である。それらが，『少年ジャンプ』を編集発行する集英社との正式契約に基づいて，日本とほぼリアルタイムでハングルに訳され韓国の本屋の店頭に並ぶわけである。

『少年チャンプ』と『ＩＱジャンプ』の発行部数は，我々の取材によれば，両誌を合わて約50万部。ただし，漫画雑誌は，通常，一人で読むのではなく友人の間で回し読まれることが多い。特に一冊1500ウオン（約250円）という値段は，韓国の子どもの小遣いで買うにはかなり高価である。そのため，回し読まれる率はかなり高いと思われる。その意味で漫画雑誌の実際の読者数は，発行部数の数倍であると考えられる。

さらに，韓国の子どもや若者がハングルで読むことができる日本の漫画は少年誌のみではない。日本と同様に少女や成人女性向けの雑誌にも掲載されている。やはり日本と同様にアニメもテレビやビデオを通じて見ることができる。また，先に指摘したように，海賊版の単行本が数多く発行されている。これらの多様な発行形態をあわせれば，日本の漫画は，日本とそれほど変わらない広がりの読者層を韓国に獲得している可能性がある。

これらのことにより，我々は先に提示した日本の漫画のハングル訳と韓国の漫画文化についての仮説に関連して次ような考えを持つようになった。

①日本と韓国の子どもと若者が同じ漫画を，それもリアルタイムで読んでいるという事実。
②漫画の人気の秘密は，作者と読者の間にある“공감대（コンガムデー　共感帯）”であるという黄部長の指摘。
③この二つの事実は，両国の子どもと若者の間に，日本の漫画を媒介にして，意図せざる過程において，“공감대（コンガムデー　共感帯）”の基盤が形成されつつあるということを示唆しているのではないだろうか。

他方，あえて言うまでもなく作者と読者は互いに異質な存在である。

したがって，我々は，黄部長の指摘する“공감대（コンガムデー　共感帯）”という言葉が意味する内容を次のように定義したい。

作者と読者が同一の存在になることからではなく，相互に異なる存在であることを認め合いつつ，しかし作品という共通の場において，両者が互いに相互の世界を共有しようとする時に，初めて生じるもの。

これが，先に，“공감대（コンガムデー　共感帯）”という言葉を，「日本と韓国の子どもや若者が，真のイコールパートナーとして共に生きる世界を新たに創造するための手掛かりとなる

言葉」として位置づけた理由である。

4．今後の課題

冒頭において，我々は，互いに共有する問題意識として，「両国の歴史的事実についての教育のあり方の相違に起因する韓国の人達の日本への“いらだち（非難）”と，日本の人達の韓国への“負い目（無関心）”が相乗的に作用して，両国の教育関係者が，互いの“現状”に“同じ目の高さ”で“知りあい，学びあい，教えあう”機会を見失いがちであった」と指摘した。その結果が，図－1で指摘した日韓両国の相互認識に関する情報の差ではないだろう。

確かに日本と韓国の間には，今なお様々な問題があり，その解決への責任の多くは日本の側にあることは否定できない。だがそれゆえにこそ，日韓の子どもと若者の間に，互いの異質性を“認め合い，生かし合い，学び合い，教え合える”基盤となる新たな“공감대（コンガムデー共感帯）”を創造する契機を積極的に見出し育むことが，最も重要な課題と考える。

そしてその確かな手応えが，日本と韓国の漫画文化にあることを，以上の考察において我々は確認できたと考える。

今後，さらに我々は，インタビュー調査の結果や収集した資料の分析を次の三つの観点から進めることにより，本稿で指摘した視点をより詳細に論証していきたい。

①高校生，大学生へのインタビュー調査に現れた日本の漫画への評価に基づく韓国青少年の意識構造の解明

②日本の漫画がハングルに訳される過程で生じる意味の変化の考察による日韓両国の文化の類似性と異質性の解明

③漫画を代表とする日本の現代文化流入に対する韓国の知識層の評価の特性とその背後にある意識構造の解明

注　　記

1)本研究は，馬居政幸（静岡大学教育学部助教授，静岡学園短期大学非常勤講師）と夫伯（韓国慶熙ホテル経営専門大学校専任講師，韓国外国語大学非常勤講師）との共同研究による成果を，日本語版では馬居が，韓国語版では夫伯がファーストオーサーとして発表するものである。また，本研究過程において，国立ソウル大学校ソウル師範大学の曺永達助教授に貴重な意見をいただいたことを記しておく。

2)この視点の詳細については，馬居政幸著「国際化社会と公民教育」（『公民教育の理論と実践』日本公民教育学会編　第一学習社　1992年　所収）を参照いただきたい。

3)我々がこのような視点を持つにいたった前提にある論理とその背景について理解していただくために，やや長文になるが，馬居政幸の拙文「日韓公民教育シンポジウムに参加して」を掲載しておきたい。これは，1991年3月28日に韓国社会科教育学会と日本公民教育学会の代表により，ソウル大学において実施された「日韓公民教育シンポジウム」に，馬居が参加しての感想を，帰国後にまとめたものである。

「日韓公民教育シンポジウムに参加して」

私にとって今回のシンポジウム参加は六度目の韓国訪問となりました。特に今年に入ってから三度目です。一回目は，1月初旬に家族で訪れ，ソウル，大田，馬山，慶州を往復

しました。二回目は，２月中旬に私の研究室の学生とともに，公州師範大学と公州教育大学の学生さん達と教育を通じての交流を進めるために訪れました。場所は大田でした。そして三回目が今回のシンポジウム参加となったわけです。

そこで，このように短期に連続して韓国を訪問することになった理由と，実際にシンポジウム参加させていただくことにより得た私なりの韓国に対する課題意識ならびに今後の交流と研究計画について略述したいと思います。

私の韓国への関心は，1986年10月から1988年3月までの間，教員留学生として私の研究室にこられた宋在鴻先生との出会いにより始まりました。宋先生は，現在，中学校教員として大田市の梧井中学校で社会科と国史科を教えておられます。

この宋先生が留学時に示された非常に真摯な研究態度や極めて積極的な探究心あるいは向上心に接し，私は韓国という国の教育の伝統と現状に非常に強い興味を覚えました。さらに何よりも，宋先生が，私を信頼してくれてか，母国を支配した日本で学ぶことについてのアンビバレンツな思いを，切々と語ってくれたことが，韓国を訪問する最も大きな動機となりました。その理由は，残念ながら私には，宋先生のこのような思いを，言葉では理解できても，自分の経験に基づく実感として共有することができなかったからです。

私は，宋先生の信頼に応えるために，また韓国・朝鮮半島の支配にかかわった世代を親に持つ一人の日本人として，このような宋先生の思いの背後にある韓国の人と社会の現実を，自分の五感で確かめなければならないと考えました。

他方，宋先生の研究意欲への興味は，漢江の奇跡といわれる急激な経済成長による韓国の社会構造の変化が，人の育ちの過程全体にどのような影響を及ぼしているかを把握してみたい，という研究者の興味へと変わっていきました。

その結果，宋先生が帰国した年の夏を最初として，宋先生が住む大田を訪ね，小学校，中学校，高等学校を訪問しました。そして，社会科や国史の授業を見せていただき，宋先生の通訳により子ども達と語りあいました。

また，宋先生が卒業された公州師範大学を訪問し，宋先生の恩師や大学で研究を続けておられる友人を紹介していただき，韓国の教員養成の問題や社会科教育や国史教育の課題について，あるいは日韓関係を含めた日本の社会科教育の問題について意見を交換し，時に論争にもなりました。

他方，百済の都である扶餘をはじめ古代日本と関わりの深い史跡をたずね，独立記念館へも三度行き，板門店にも行きました。そして，韓国にとって日本がどのような国であったかを，深い反省とともに学びました。

また，訪韓した際には，ホテルではなく宋先生のお宅に泊まりこみ，韓国の中学校の教師と同じ日常を経験しながら，宋先生の奥さんに連れられて大田の市場やデパートに行き，消費生活の様子を把握するための参与観察を行ったり，宋先生の友人のご家族に家庭内における人間関係や生活様式についての聞き取り調査等を試みてきました。

もっともいずれも，私の疑問や興味を，思いつくままにさまざまな人達にぶつけたものにすぎず，厳密な学問上の手順をふんだものではありません。しかし，それゆえにかえって，宋先生の通訳を介してではありますが，書物では感じとれない韓国の人達の日常生活に即した感情や行動を，少しづつではありますが，自分の五感に刻むことができつつある

のかな，という実感を持てるようになってきました。

そしてその結果，現代の韓国と日本との関係について，教員養成にかかわる日本の教育研究者である私自身の課題として，次の三つの問題があると考えるようになりました。

第一に，韓国を知ることなく日本を語ることはできないということです。

すなわち，国際化は自国理解が基礎といわれますが，日本に関する限り，自国理解は，韓国にとっての日本の歴史を理解することによって初めて得られるというのが，現在の私の実感です。任那と伽耶との関係に始まり，戦後の日本経済の復興と朝鮮戦争(韓国動乱，6.25) にいたるまで，日本の歴史は韓国（朝鮮半島）からの視点を無視しては描けないはずです。その意味で，日本の歴史学も社会科教育（歴史教育）も大きく見直すべきだと考えます。

しかし，それは単に教科書記述の問題に止めてはならないと思います。少なくとも，私は，これまで日本において，また韓国との間で論議されてきたような教科書問題については，少なからず疑問を持っています。この点については，改めて論じたいと思っています。

もちろん日本という国家が朝鮮半島（韓半島）で生活する人達に対しておこなってきた行為を，被害者の側である韓国の人達の立場から理解しなければならないということについて異論はありません。しかし，それは韓国と日本の国境を高くすることであってはならないと考えます。

私が韓国の地で得た実感は，韓国と日本は本来同じ民族であるはず，ということでした。たまたま半島にいた人達と島に渡った人達の違いはあっても，文化や歴史は同一圏として論じるべきだと思います。たとえば，私が生まれた四国の歴史は，現在住んでいる遠近江よりも東にある国との関係よりも，半島との交流の歴史こそ重要だと思うようになりました。

国と国を隔てる枠組みを相対化すること，すなわちボーダーレスな認識は，未来にではなく過去にこそ向けられるべきだと考えます。

さらに，このような認識を得るためには，まず，韓国の地を訪れ，そこで生活する人達の姿から直接学ぶことが必要であることを強調したいと思います。とりわけ，このことは社会科，なかんずく公民科の教師に不可欠であるはずです。

歴史教育や地理教育に関しては，日韓両国に立場のズレはあれ，それなりに研究の蓄積はあるものの，誕生まもない公民科教育には，残念ながら少ないと思います。さらに，私は，単に歴史が浅いということだけではなく，法律，政治，経済，社会，文化等，まさに両国の現在と未来に直接かかわる教育を目的とする公民科教育本来のあり方として，生活者の実態を自ら確認することが，他の教科以上に重要な課題になると考えます。

したがって，そのための機会をどれほど用意できるかが，公民科の教員養成にかかわる私自身の課題であると考えます。

第二の課題は，この第一の課題に連続するものです。

すなわち，過去の歴史を重視すればするほど，単にその歴史を見直し教えることだけではなく，現在と未来に生きる両国の若者が互いに直接知りあえる機会をどれだけつくることができるかが，より重要な課題だと考えます。

私がこれまで韓国で語りあってきた小学生，中学生，高校生，大学生に感じる共通点は，日本の過去に対する厳しい批判意識とともに，日本を好むかどうかに関わりなく，現在の日本とそこで生きる同世代の人達のことを知りたいという欲求の高さでした。

詳細に調査・分析したわけではありませんので断定できませんが，韓国の子どもや若者の意識あるいは価値観の中において，教科書を代表とする教育を通じて学ぶ日本の過去と，マスコミ等の情報を介した現在の日本への関心と理解が，必ずしも整合的に結びついていないと思います。

他方，日本の学生に韓国のことを話題にしてとまどうのは，ほとんどの場合，何も知らないということだけではなく，よほど丁寧に話さないかぎり興味すら示さないことです。もっとも，知らない故に偏見も少ないといえるかもしれません。少なくとも，進んで韓国の文化や日本とのかかわりを問う視点はなきに等しいといわざるをえません。あるいは，自分とのかかわりを意識する機会がないといった方が正確かもしれません。これは彼らや彼女らの責任ではなく，私より上の世代の責任だと考えます。

日本の韓国に対する償いは，何よりも，このように異なる世界に生きる両国の若者が，互いに理解しあえる共通の場に立つことができるための相互交流の機会を用意することに向けるべきだと考えます。

さらにこの点に関して，日本のみでなく，韓国の大人もまた変わるべきだと考えます。「近くて遠い国」から「近くて近い国」へと日本と韓国の関係を変化させるために，そして，韓国と日本が本当のイコールパートナーなるために，日本の過去に対する批判のみでなく，韓国の未来を担う子どもと若者をどのように育てるかについて，より真剣に検討すべき時期にあると考えます。

しかし，そのための第一歩を踏み出す責任は，やはり日本の側にあることは強調すべきでしょう。それも教育関係者，なかんずく社会科と公民科教育の責任は重いと考えます。

そしてそれは，いうまでもなく私自身の課題でもあります。そのための私なりの第一歩として，先ず，中学生になった長男に学ぶ機会を与えることを目的として，家族全員で今年の１月に韓国を訪れました。そして，宋先生にお願いし，独立記念館を初め，日本とかかわりのある地にたって，両国の歴史を長男に教えていただきました。

また，「韓国の人と歴史と教育の旅」と題し，教員として巣立つ私の研究室の学生 11 名と静岡県内で社会科教育や生涯学習の共同研究を進めてきた友人の教師や教育委員会の人達４名を誘い，16 人で２月に訪韓したわけです。

そして，この二つの試みにより，私一人で訪韓した時に気づかなかった新たな課題を意識するようになりました。それは，日本ではなく韓国の日本に関する教育のあり方，あるいは教育研究のあり方に対する疑問です。これが，三つ目の課題です。さらにこの疑問が正当なものかを確かめることを目的の一つとして，３月のシンポジウムに参加させていただきました。

すなわち，第三の課題は，誤解を恐れずにいえば，韓国はそのマイナス面も含めて，もっと日本の現状に学ぶべきであることを，日本の教育研究者としてどれだけ主張できるかということです。さらに，その前提として，日本の研究者は，韓国の現実についての研究実践をふまえて，韓国の教育関係者が，日本の現実との比較において，もっと詳細かつ厳密

に韓国の現実を認識する努力を払うべきであることを，より積極的に発言していかなければならないということです。

私は，韓国の地で日本をみつめ，韓国の中に実質的に入り込んだ日本の文化やシステムを知れば知るほど，現在のような韓国社会と教育のあり方を続けている限り，韓国がこれから当面するであろう教育の問題を解決することはかなり困難ではないかと思わざるをえません。

過去の歴史の評価にかかわらず，韓国が日本の経済成長を追っている事実は否定できないと思います。その結果，日本と同様に，社会構造が変化し，それに伴い，人の育ちのシステムもまた急激に変化（解体？）していることもまた否定できないと考えます。経済成長にともなう負要因は公害のみではありません。家族や地域における人間関係，あるいは子育てや遊びの文化，そして学校教育の機能を大きく変化させることにより生じる子どもの育ちの問題が，今後，顕著になってくるはずです。その兆しは既に現れています。しかし，そのことにどれほど気づいているでしょうか。あるいは研究がどれほど進んでいるでしょうか。何よりも，実態の把握がどこまで進んでいるでしょうか

日本に学べということは，もちろん日本が優れているからではありません。同じ東アジアの儒教と仏教の伝統を持つ国として，アメリカの教育制度を取り入れた国として，急激に産業化を進めた国として，非常に就学率の高い学校制度を近代化の手段として用いている国として，日本が陥った問題について韓国はもっと謙虚に学ぶべきです。

韓国と日本の差を無視するわけではありませんが，かなり類似した社会構造と社会意識を持ち，やはり類似した制度を導入したのが両国であることも否定できないと思います。それも若干のタイムラグをともなってです。

経済の分野ではタイムラグのデメリットが問題視され，後発効果を生かしつついかにそれを克服するかが課題になると思います。しかし，教育の分野では，むしろこのタイムラグこそメリットになるはずです。

欧米なかんずくアメリカの制度を外から急激に導入した際に生じる問題を問う上で，日本は非常に良質な実験データを提供できるはずです。欧米の優れた制度や知識を国民に等しく教えることが，社会を豊かにすると素朴に信じられる時代は過去のものでしょう。

日本の失敗とそれを克服するための施策やその結果を詳細に吟味することにより，韓国は自国の文化や社会習慣や行動様式の特性をふまえつつ，近未来を予測した教育の再構成をはかることは可能なはずです。日本が手本ではなく，日本が当面している問題の原因や解決方法が，韓国にとって重要なデータになるはずです。韓国にとって，社会構造の異なる欧米の教育論や改革方法よりも，その問題点も含めて，日本の現状分析の方が有意味であると考えます。

しかし，残念ながら，過去の日韓関係を論及し，その結果を教えることはあっても，現在の日本に対するアプローチは非常に弱いと思わざるをえません。教科書に記された知識を問題にするだけでは，日本の教育のメリットもデメリットも学びとることはできないでしょう。

しかしその責任は，日本の研究者にこそ問われなければならないと考えます。日本の加害者性への心情的負い目を感じても，それを現代韓国の教育に積極的にかかわる意欲や実践にまで高めることを怠ってきたのではないでしょうか。

そしてこのこともまた，私自身の反省をふまえての，自らへの問いかけであることはいうまでもありません。

以上，現代の韓国と日本との関係について私自身が問題視する三つの課題を提起してきました。先にも述べましたが，いずれも私の主観的判断であって，系統だった日本と韓国の研究状況を調査した上でのものではありません。自分で見聞してきたわずかな経験に基づくものにすぎません。

その意味で，このような私の課題意識がどれほど韓国の現状をとらえたものかを確認するために，今回のシンポジウムに参加させていただいたわけです。

その結果は，私が期待した以上の成果を得ることができました。

まず，付属高校と中学の訪問においては，校長先生の懇切丁寧な説明により，現在の韓国の後期中等教育が当面している問題を理解することができました。授業参観でも，これまで私が観察してきた大田の中・高等学校の授業と比較することにより，授業形態，生徒の学習方法，教師の教授様式，教室の掲示物，教具や教材など，地方と中央の共通点と相違点の理解を深めることができました。

その一つは，韓国の学校教育の質的な高さです。確かに，日本は経済的には韓国の上位にあります。しかし，学校教育の場合には，施設・設備の問題は別にして，教師の教育に対する誇りや生徒の学習意欲などの質的なレベルにおいては，日本よりはるかに優れた面を持っていることを確認することができました。

ただし，その一方で，私は，大田の学校を訪問し行った先生方へのインタビューや子ども達との会話から，経済的に日本に追いつき追い越そうとする努力が，韓国の教育の良質な面を変質させ，今日の日本の教育システムが陥っている問題点にも追いつき追い越すことになる危険性があることへの危惧を抱いていましたが，この点についても，残念ながら確認せざるをえませんでした。

その意味で，両国の教育のあり方を考えるために，日本と韓国の教育関係者が積極的に交流し共同研究を進める必要性を改めて痛感しました

他方，シンポジウムにおいては，ソウル大学校師範大学社会科教育科長の尹先生をはじめ，各先生方により，論議の内容から会場運営にいたるまで，私たち日本の研究者の立場を理解していただいた上でのさまざまなご配慮に接し，終始感謝の思いで参加させていただきました。

また，韓国の各先生方の発表から，韓国における社会科教育の研究と実践の歴史が，日本の社会科教育や公民教育の歴史と重なる部分が多いことを知ることできたことは，非常に新鮮な発見でした。もっとも，このような私の感想は，韓国の研究を進めてきた方から見れば，非常に初歩的な認識だと思います。しかし，何の研究の蓄積もなく，宋先生との個人的な友情にたよって，私的な思いのみで韓国とかかわってきた私にとって，いつわらざる感想です。

加えて，その意味で，私一人では紹介していただける機会をえることが困難なソウル大学校師範大学を初めとする韓国の社会科教育にかかわる先生方に，自分の問題意識を直接問うことができたことは，何よりの喜びでした。

特に，上記の三番目の課題を念頭においた私のぶしつけな質問に，多くの先生方から韓

国の現状の問題を指摘しつつ真摯にお応えいただいたことに，非常に深い感動をおぼえました。とりわけ，司会をされた曺先生の最新の研究を踏まえた視点と歯切れのよいシャープな論理，あるいは韓国社会科教育の成立に対して大胆な仮説を提示された李先生を代表として，韓国の社会科研究の未来を担う若い知性のレベルの高さを知ることができたことは，今回の最も大きな成果でした。また，清州教育大学の金先生，公州大学校の金先生，韓国教育開発院の徐先生から，私の問題意識を認めていただいた上で，韓国の教育研究の現状と課題を御教示いただくことができ，今後の私自身の研究計画に非常に有異議な示唆を得ることができました。

さらに上述したことのみでなく，日韓両国の各先生方の発表や論議から，あるいは，休憩時やパーティーの席上で，言葉では言い尽くせない数多くのことを学ぶことができました。その成果は，今後の私の研究と実践のなかに生かすことで示していきたいと決意しております。

このように，私にとって，極めて実り多い成果を今回のシンポジウムで得ることができました。ただし，いずれも私自身の非常に個人的な経験をもとにしたものであり，それもシンポジウム当日のみ参加しての感想にすぎません。しかし，このような素晴らしいシンポジウムを開催するためには，準備にあたられた日韓両国の諸先生には大変な御苦労があったと思います。とりわけ，何度も訪韓され企画と準備にあたられた阪上先生に感謝の言葉もありません。心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

そしてさらに，阪上先生をはじめ今回のシンポジウムにおいてお世話になった諸先生方への感謝の意は，何よりも具体的な実践や研究成果をあげることにより示すことであると考えます。その意味で，今後の私自身の研究と実践の方向を二点提示することでこのメモを終わりたいと思います。

1．日韓両国の青少年における相互理解推進のための基礎的研究

韓国の青少年を対象に日本理解に関する実態調査を行う。特に，日常生活の中に実質的に入り込んでいる日本の文化（まんが本，玩具，ビデオ，テレビ番組，音楽，ファッションなど）の実態をふまえ，韓国の子どもたちや若者の中にある日本の姿を多面的に把握する調査を実施する。

そして，

①韓国の学校教育を中心とする公的な教育機会を通じて教えられる日本理解，

②家族を中心とする日常のタテの人間関係の中で学ぶ日本理解

③遊び等によるヨコの友人関係の中で獲得する日本理解

④マスコミ等の情報環境による日本理解

これらの相互の関係を実証的に把握することから，韓国の青少年教育における日本理解に関する実態を明らかにする。

また，同様の観点から日本の青少年を対象とする調査を行うとともに，相互の比較から，日韓両国における教育課題を研究する。

2．韓国における産業化による社会構造の変動と教育システムの変化に関する実証研究

韓国内の特定地域を選び，急激な産業化にともない変化する人の育ちのシステムの問題を，

①社会移動の実態

②地域構造の変化による地域社会における人間関係の変化

③家族構造の変化による家庭内における教育のあり方の変化

④学校教育の量的拡大とその社会的機能の変化

⑤教育課程，授業形態，教師集団，生徒集団，教師と生徒の関係などの学校内の教育構造の変化

などの観点から多面的に研究し，日本における同様の変化と比較することから韓国の学校教育や家庭教育あるは地域社会における教育課題を明らかにする。

私は，これまで，静岡において，大学では社会科教育の講座を担当し社会科教育の教員養成と戦後の社会科教育の変遷過程についての知識社会学的な研究を進めてきました。また，大学の外では，県や市町村の教育委員会の人達と連携をとりながら，地域社会における生涯学習推進のための実証研究や教育政策上の課題の研究を進めてきました。

さらに，現在は，両者の研究成果をふまえ，開かれた学校という視点と地域生涯学習の視点を結びつけることにより，改めて現代の子どもの日常生活や親の生活様式に即した人の育ちのシステムの再構成のあり方を模索しています。

そして，その研究の方向を，社会教育や学校教育を全体として論ずることからではなく，新学習指導要領の可能性を積極的にとらえ，生活科と社会科と公民科を連続するものとして位置ずけ，教科教育の次元から論ずることを核として進めています。その理由は，社会科教育と地域生涯学習という学校の内と外の教育のあり方を，それも静岡県内の具体的な地域と学校に即して研究を進めてきた者として，子どもの日常に即した育ちのシステムを再構成するには，何よりも学校を変えなければならず，学校を変えるためには教師が変わらなければならず，教師が変わるためには，教室の中の授業の教科の次元から変えなければ，どんな改革案も理想論に終わると考えるからです。

したがって，上記の韓国に対する二つの研究計画は，いずれも直接論及してはいないものの，公民科教育や社会科教育の課題を明らかにすることを最終目的として進めるものです。また，この二つの計画が，これまで私が静岡で実施してきた研究の応用であり，また今後進めようとしている主題との比較研究であることも理解していただけると思います。

しかし，いずれの研究も私一人でできるようなものでないことは明らかです。今後，さまざまな先生方のアドバイスを受け，また協力をいただいて進めていかなければならないと思っています。その意味で，今回のシンポジウムに参加された先生方に御指導をいだげる機会と，公民教育学会をはじめとするさまざまな研究機関による共同研究の機会が得られることを願って，拙いメモを終わりたいと思います。

1991年4月15日

4)具体的には次の馬居政幸の拙稿を参照いただきたい。

①「『近くて遠い国』で学んだこと」（『PART II』№17　“連続セミナー授業を創る”機関

誌　1991)
②「“生活者”にとっての“意味”と“思い”からの再構成を」(『教育科学　社会科教育』No.358 12月号　1991　明治図書)
③『朝鮮半島』を解く迫力あるネタはこれだ」(『教育科学　社会科教育』No.372　1月号　1993 明治図書)